

第14回夏期福音特別集会(2)

無——ピリピ書第2章

1967年8月26日

小池辰雄

御霊の交際 キリストと同心であれ 有形は無形より生ず 気の現象したもの 本来無一物
有らしめられて在る者 自分を無と自覚 即身即主 自分の自由に死ぬ 祈りで結ぶ 力ある
愛に圧倒 愛信一如 無の現実を生きる 生を生にする者あり キリストに即する無者

【ピリピ2】

1 この故に若しキリストによる勸、愛による慰安、御霊の交際、また憐憫
と慈悲とあらば、² なんじら念を同じうし、愛を同じうし、心を合せ、思う
ことを一つにして、我が喜びを充しめよ。³ 何事にまれ、徒党また虚栄のため
にすな、おのおの謙遜をもて互に人を己に勝れりとせよ。⁴ おのおの己が
事のみを顧みず、人の事をも顧みよ。⁵ 汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。
⁶ 即ち彼は神の貌にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとは思わ
ず、⁷ 反つて己を空しうし、僕の貌をとりて人の如くなれり。⁸ 既に人の状に
て現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順い給えり。
⁹ この故に神は彼を高く上げて、之に諸般の名にまさる名を賜いたり。¹⁰ これ
天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、悉くイエスの名により
て膝を屈め、¹¹ 且もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言いあら
わして、栄光を父なる神に帰せん為なり。

¹² されば我が愛する者よ、なんじら常に服いしごとく、我が居る時のみな
らず、我が居らぬ今もますます服い、畏れ戦きて己が救を全うせよ。¹³ 神は
御意を成さんために汝らの衷にはたらし、汝等をして志望をたて、業を行わ
しめ給えばなり。¹⁴ なんじら咄かず疑わずして、凡ての事をおこなえ。¹⁵ 是な
んじら責むべき所なく素直にして、此の曲れる邪悪なる時代に在りて神の瑕
なき子とならん為なり。汝らは生命の言を保ちて、世の光のごとく此の時代
に輝く。¹⁶ かくて我が走りしところ勞せしところ空しからず、キリストの日
にわれ誇ることを得ん。¹⁷ さらば汝らの信仰の供物と祭とに加えて、我が血
を灌ぐとも我は喜ばん、なんじら衆と共に喜ばん。¹⁸ かく汝等もよろこべ、
我とともに喜べ。

¹⁹ われ汝らの事を知りて慰安を得んとて、速かにテモテを汝らに遣さんこ



とを主イエスに頼りて望む。20そは彼のほかに我と同じ心をもて真実に汝らのことを慮^{おも}はかる者なければなり。21人は皆イエス・キリストの事を求めず、唯おのれの事のみを求む。22されどテモテの鍊達なるは汝らの知る所なり、即ち子の父に於ける如く我とともに福音のために勤めたり。23この故に我わが身の成行^{なりゆき}を見、直ちに彼を遣さんことを望む。24我もまた速かに往くべきを主によりて確信す。25されど今は先^{まず}われと共に働き共に戦いし兄弟、すなわち汝らの使として我が窮乏^{ともしき}を補いしエパフロデトを、汝らに遣すを必要のことと思う。26彼は汝等すべての者を恋いしたい、又おのが病みたることの汝らに聞えしを以て悲しみ居るに因りてなり。27彼は実に病にかかりて死ぬ^{うれい}ばかりなりしが、神は彼を憐^{あは}れみたまえり、^{ただ}營に彼のみならず、我をも憐^{あは}れみ、憂^{うれい}に憂を重ねしめ給わざりき。28この故に急ぎて彼を遣す、なんじらが再び彼を見て喜ばん為なり。又わが憂を少うせん為なり。29されば汝ら主にありて歡喜^{よろこび}を尽して彼を迎え、かつ斯くのごとき人を尊べ。30彼は汝らが我を助くるに当り、汝らの居らぬを補わんとて、己が生命を賭け、キリストの事業のために死ぬばかりになりたればなり。

●御霊の交際

第2楽章は谷底に降りる。

「この故に若しキリストによる勸^{すすめ}、愛による慰安^{なぐさめ}、御霊の交際^{まじわり}、

この中で一番大事な言葉は「御霊^{みたま}の交際^{まじわり}」「コイノニア・プニユーマコス」という言葉です。しかしながら、この「愛の慰安^{なぐさめ}」という「慰安^{なぐさめ}」がまた「プニユーマコス」に関連のある言葉でありまして、とにかく、聖霊は「慰め主」「パラクレートス」といいますが、パウロの言葉は数珠つなぎみたいに切ることができない。玉が転がっているようなものです。どこでどうなんてことはないわけです。

ドイツ人というのは、「第1章、第2章、第3章」なんていつて章分けする。これはドイツ人の特色なんです。非常にジステマーティッシュ、組織的なんです。日本人はおよそ組織的なことが苦手な国民らしい。そういうことの好きな人ももちろんありますが。日本人のはむしろこういうような具合に、どこで切っても差し支えない。みんなこれぐるぐる回っている。そういう不連続の連続というようなのが、実はパウロさんもそういう面を持っている。だいたい、福音の世界は「組織的」(ジステマーティッシュ)でなく、「有機体的」(オルガニッシュ)なんです。人間の体が有機体、どこを切りましても血が流れている。どこをさわりましても神経が通っている。

また憐憫^{あわれみ}と慈悲とあらば、²なんじら念^{おも}を同じうし、愛を同じうし、心を合せ、思^{おも}うことを一つにして、我が喜^{よろこ}びを充^みしめよ。



「あらば」なんて訳してあるけれども——なるほどそういうギリシャ語にもなっているけれども——こういうところは、「お前たちはそういうものがあるから」と読む。聖書のもうひとつ奥の読み方をする。それが

「儀文は殺し霊は活かす」

ということ。聖書そのものを霊をもって読まなければ読めない。

解釈者が文法的に一生懸命で文法に忠実ならんとしてどうのこうのとやっている。研究はそれでいい。けれども、研究ではどうにもならないと申し上げているとおり。もちろん、研究もあるときは役に立つこともあります。まあ研究したい人はしたらいい。けれども、それでお終いではダメなので、

「こういうわけなんだが、しかし、その本当の内容は、現実是这样だ」

と。聖書の世界はみな現実ですから、仮定の世界ではひとつもない。現実の世界をただ仮定的表現で言っているだけのはなしです。

「こういうものはもう来ているじゃないか」

ということ、

「憐憫あわれみと慈悲とあるから、お前たちは念おもいを同じうし、愛を同じうし、心を合せ、思

うことを一つにして、我が喜よろこび悦みを充みしめてくれよ。大丈夫、充みしめてくれるね」

というわけです。パウロはこのピリピの教会の人たちに本当に親愛の気持をもってこう語っているわけです。

3 何事にまれ、徒党また虚栄のためにすな、

と。ところが、人間というのは生まれつき徒党的にできている。政党なんてものは最もそれがよく表れている。政治の世界、それから学問の世界でも、医学の世界でも、非常にその徒党的なものが災いしている。あるグループができることは止むを得ない。○でも△でも□でも☆でも、どれでもいい。けれども、それが「お前は○ではいかん、☆の形になれ」というのは徒党の根性です。また、虚栄というのは要するに自己をもたげるのが虚栄。自己義認というのが虚栄の姿。何とか自分を自讃するようなこと、それがこの虚栄というやつ。

おのおの謙遜をもて互に人を己に勝まされりとせよ。

謙りです。それからそれがひとつのきつかけの言葉になっていくんですが。その「へりくだり」というのはどんなことかということ徹底的にこれから言おうとしている。

4 おのおの己が事のみを顧みず、人の事をも顧みよ。

パウロは非常に一面、人に分るように言っている。その点はキリストよりも激しくないですね。イエスはなかなか激しい。なかなかどころのさわぎではない。パウロは人間の弱さを——キリストももちろん知ってらっしゃるんですけども——パウロは私たちと同じように躓いたり転んだりする男ですから、よく皆に通ずるように、いろんな場合を考えて、

「まあ、自分のことを考えてもいいけれども、人のことも考えなさい」



と。そんなことを言うかと思うと、しかし、パウロは決してそれでもつてよしとしているわけではないので、弱き人には弱きように語っているわけです。

●キリストと同心であれ

最も大事なところにこれから降りて行こう。どん底に、谷底に。これから読むところが、第2章の中心である。

5 汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。

この訳は面白いな。原語はその通りではありませんけれども。「キリストと同心であれ」と。同じ心になれ、同質の心となれ。「キリストの心」というのはどういうことかというところ、

6 即ち彼は神の貌^{かたち}にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとは思はず、⁷反つて己を空しうし、

「空しうし」は「ケノーシス」という字ですが、自分を本当に空しくして、「無」または「空」として、

僕の貌^{かたち}をとりて人の如くなれり。⁸既に人の状^{さま}にて現れ、己^{ひく}を卑^{ひく}うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順^{したが}い給えり。

十字架の姿はどん底ですから。ここに「順^{したが}い給えり」とある。

9 この故に神は彼を高く上げて、之^{もろもろ}に諸般の名にまさる名を賜いたり。¹⁰これ天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、

この三界ですね。天上、天下、地下と。

悉^{ことごと}くイエスの名によりて膝を屈め、¹¹且もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言いあらわして、栄光を父なる神に帰せん為なり。

決定的な言葉です。いかなる他の宗教もこの宣言にはかなわない。キリスト教をいろいろ引用して、どうのこうのと新興宗教が寄せて来たってそんなものはかなわない。

そこで私たちは、このみ言をしつかり今日は喰わなくては。

「我はアブラハムより先に在りしなり」

と、天界にキリストは居られた。

「言は神と共にあり、言は神であつた」

と。始めに言があつた。それは霊であり言であるけれども。見えない。見えないけれども、実在する。「言」というが、ヨハネは当時の哲学の言葉を使っただけのはなしで、「ロゴス」と言おうが何と言おうがそんなことはいいですよ。そういう、なんともこちらの五感で把握することのできない実在であつた。霊的実在である。その霊的実在者キリストは、そうでなければ、「我はアブラハムより先に在りしなり」なんては言わない。

「よろずのものはこれによつて造られた」

という。これはパウロがローマ書でいつている言葉と同じ言葉だ。



●有形は無形より生ず

同じような言葉が、これは『列子』の中に出てくる言葉ですが、私は列子を読んで驚いた。

「夫有形者生於無形、則天地安從生。」

故曰、有太易、有太初、有太始、有太素。

太易者、未見氣也。太初者、氣之始也。

太始者、形之始也。太素者、質之始也。」

「夫れ有形は無形より生ぜば、則ち天地は安くから生ぜる。故に曰く、『太易あり、太初あり、太始あり、太素あり』と。太易は、未だ氣を見ざるなり。太初は氣の始めなり。太始は形の始めなり。太素は質の始めなり。」

氣、形、質と。キリストは、

「我は始めなり、終りなり」

と言いました。アルファにしてオメガ。始終一貫です。およそこの現象界は、形あるところのものは、無形において生ずる。

「よろずのものは、この造られたるものは、見えざるものによって成ることを

我らは知る」

と、パウロはロマ書の始めで言っている。それとまさに符合するわけであります。

即ち、キリストは、我々の側からは無形者である。形がない。神さまも無形。これはこちら側からとらえることができない。そういう実在である。無形であるが、無いのではない。いわゆる人間の五感に訴えるような形ではない。そういう実在なる無形なるものによって有形なるものが生じた。そういった端倪することのできない実在が、この有形の世界に形をとって現れた。だから、

「則天地安從生」(天地いずこによりてか生ず)

と。太易、太初、太始というものが来て、また太素というものが。そういった氣も未だ見えないところが本当に氣として発してきた。非常に根源的な消息を言ってますが、それは、キリストの「ロゴス・クリストス」としての存在をこのような言葉によって私たちは見て、非常におもしろいわけです。

●氣の現象したもの

「太初は氣の始めなり。太始は形の始めなり」

と。氣は形つくる靈である。靈であると同時に形をもっている。即ち、靈肉渾然たるところのキリストはイエスという。イエスは氣の現象したものであり、またそこにはっきりと、ヨハネ伝1章14節に出ているように、

「我らの中に幕屋をはった」

と。肉となったという、いわゆる受肉の事態です。そして、これは絶対に違った質のもの



である。そうした天的な氣、それから質、それが地的な形をとって現れた。「僕の貌^{かたち}」といえますけれども、それは僕の姿^{しよべ}であります、その僕の中の内容は、こうした原始の氣と原始の質を持つている僕です。この僕という内容をそのようにしっかりと自覚しなくてはならないわけです。

「その神の絶対の質を、神と等しくある事を固く保たんとは思わず、己をひくうして、僕の姿をとって人の如くなつた。人となつた。」

と。「人の如く」なんていったって、「人として現われた」と訳してかまわない。この「如く」は「人のように」という意味ではない。「人として現われた」で結構です。

だから、それは非常に危機的存在としてキリストは現れた。危機的実存であります、存在としては。危機的であるけれども——いつサタンにやつつけられるかもしれない。いつ罪を犯すかもしれない——けれども、そういった私たちと同じところにあるながら、この僕は、イエスという神の僕は、この氣をもっている。この質を持つている。これが神の身証である。神の身証であるためには、このような氣と質とを彼は持つている。これは自明的に持つているのではない。

神・キリスト・イエス。普通の人間たるときには「イエス」という。

「イエスのキリストたることを」

という言葉があります。「イエス」という言葉は、そういった危機的存在であるということを表す。イエスが同時に「キリスト」であるということは、このような氣と質をはつきりと持つているから、この危機的存在イエスが、

「我を見し者は父を見しなり」

ということが、はつきりとおっしゃられたわけであります。

では、いかにしてそれはイエスにおいて可能であつたか。もちろん彼のうちに、既に彼は神から来た聖靈が宿つて出来たような人ですから、もちろん神の靈が本来、彼のうちに宿つている人で、そこは普通の人間とちがう。ちがうけれども、彼は人間を救うために、人間と同質のところに来たわけです。神と同質でありながら、また人間と同質という実にふしぎなひとつの存在である。神と同質でありながら人間と同質である。

●本来無一物

そこで面白い話がある。『無門関』に出てくる禅宗の第五祖の味噌すり小僧^{こめつきおとこ}（米春男^{こめつくおとこ}、後の第六祖慧能^{えのう}）のお話。第五祖は弘忍太満禪師という。ある日、弘忍は大勢の弟子を集めて、各々悟るところを一偈^げにして提出せよと命じたところ、一番弟子の神秀^{じんしゅう}は、

「身是菩提樹、心如明鏡臺、

時々勤拂拭、勿惹塵埃。」

「身は是れ菩提^{ぼだい}の樹^き、心は明鏡^{めいきやう}の臺^{だい}の如し、



時々勤めて拂拭ふつしよくして、塵埃じんあいを惹ひかしむる勿なれ。」
と書いたら、みんなは感心した。

「本来、身は是れ菩提ぼだい樹であつて、心は明鏡めいきやうの臺だいのようなものである。それで、時々勤めてその鏡をよく拭きなさい。鏡に塵がかかるようなことをしてはいかん」

と言ったわけです。そうしたら、味噌すり小僧が、

「菩提もとは本、樹に非ず、明鏡めいは亦また臺たいに非ず、

本来の無一物、何ぞ塵埃はらを拂かつを假からん。」

「本来無一物だから、有れども無きが如きようなものだから、塵埃じんあいがかかろうが、かかりようがないではないか」

という言い方ですね。そこで、弘忍が、

「これは本ものだ、お前の方が一番弟子より上だ」

というわけで、味噌すり小僧を第六祖にしようとして衣鉢を与えたという話。ところが、

「ねたまれるからお前は逃げてゆけ」

と逃がしてやった。ところが、弟子どもは、「あの野郎はけしからん」というわけで追つかけた。一番力の強いのがとつ捕まえようとした。そしたら、

「お前たちは袈裟が欲しいのか。それでは、上げますよ」

と投げてやった。その衣を持ち上げようとしたが、衣が石の如く重くして上がらなかったという。ということは、その味噌すり小僧が本当に仏の靈に化体されていたわけです。そういう事態だから靈に打たれて手が上らない。何も衣が重いのではないので、手が動かない。

「さすがにお前は本ものだ」

と言って参ったという、有名な話を書いてある。

この文句は最後の文句ではもちろんない。

「身は是れ菩提ぼだいの樹、心は明鏡めいの臺たいの如し」

という、本来はひとつの真理なんです。それを今度は、

「時々勤めて拂拭ふつしよくして、塵埃じんあいを惹ひかしむる勿なれ」

という、ここのもう落第なんだ、この二句で。

「本来、菩提樹であつて明鏡なんだ」

ということと、

「本来無一物である」

ということとは、実は同じことを別な角度から自覚する。これが福音の自覚、福音の把握なんです。ただ、無がいいのではない。相対的な有としてこれを考えていたら、もうここでもって落第しているんです。

身が菩提樹であつて明鏡であることが本質ならば、本当は塵がかかろうとしてもかからない。そのことを自分の自覚としていけば実は、



「菩提は本、樹に非ず」
もと

と。菩提なんていつているけれども樹ではないと。

私たちは神の似姿に造られている。創世記1章27節に書いてあるように、神の似姿に私たちは造られている。即ち、質は同質に造られている。本来、同質なんです。本来、同質なんです。けれども、この本来同質を本当にこれを自分のものとしていくことができない。人間の側からは、無形とか、何とか否定の形でなければ、否定の表現でなければ言うことのできないのが本当の世界なんです。「無」という。「無い」ということではない。どうにも表現できない、どうにも掴みようがない、量りようがない、見ようがない、聞きようがない、という「無」^{ない}ですから。ということは、ものすごい霊的な有であるということなんです。これにおいて、我々は造られたるものです。

●有らしめられて在る者

人間はこの「造られた」という言葉が既に躓きになりますけれども、何か粘土細工で造るような。それは創世記にはそう書いてあるよね、昔の人はそう思ったから。しかし、そういうふうに思ったって、そういうように表現されたって、造られているということの意味は、我々がどのように造られたかというの、もうそれは本当に神の一息でもつてつくられているわけです。なにもいわゆる人間の手がある神さまでもなくてもない。

そういう超絶の実在の世界。私たちはその実在の似姿と同質に造られている。それを失ったのが「パラダイス・ロスト」で、創世記から黙示録に至るまでの人類の歴史は、個人の、母の胎内から死に至るまでの個人の歴史がこれを写している。極小の世界が大宇宙の構造と大いに似たものがあるらしい。それと同じように、極大なるものと極小なるもの、歴史の大きな流れと個人の生涯の歴史というものが非常に相似的な、類似的なものがある。

だから、創世記の神話は決して神話ではない。我々の現実を表現している。誰か、

「私はパラダイス・ロスト(樂園喪失)ではありません。パラダイス・リゲインド(樂園回復)は、パラダイスは自分で得ました」

と言える人が世界中にどこに一人でもいますか。誰もこれが言えない。これがパウロの言った、

「義人なし」

ということ。

「創世記の神話をあざける者は誰だ。お前自身の事実ではないか」と、こう迫ってくるわけです。

まあ、今の青年諸君はそういう一番根本的な自覚をしようとしなやか。やれ社会だ、政治だ、経済だ、なんだかんだと、もうそういうことが最大の問題であるかのごとく。教育が根本的にダメですね。一番大事なのが先生です。先生たちの自覚が足りないからどうにもなら



ない。

●自分を無と自覚

それを失ってしまった。本来はそうであるが、しかし、その本来そうであるものを、その有るものを本当に自覚する世界は、それを「無し」と自覚しなければだめ。「有る」と自覚したらだめなんだ。そこがこの味噌すり小僧の素晴らしいところだ。有るものを「有る」として相対的な有に自覚するのは、もう私することになるからだめなんだ、私したら。

「はい、有ります。有りますけれども、これは私のものではありません」

と。これがキリストの自覚なんです。キリストは、「ホモウジウス」、神と「同質」である。神と同質であるナザレのイエス・キリストが、「善き先生」と呼ばれると、

「なぜ私を善いと言うか、善きものは神の外にない。私は何もできない、神さまがさせているだけだ。私は何も教えることができない、神さまが言わせているだけだ」

と。これが、キリストがこのみそすり小僧と同じように、自分を「無」と自覚しているわけである。本当に有るものが、自分の自覚においては無であるという。これが大事なことです。

私たちはどこまでも「有らしめられて在る者」であって、自ら「有りて在る者」ではない。太陽は地球を有らしめている。地球は「私は在る」といったら、地球はいつわりです。地球は、

「私は太陽によつて有らしめられている」

と、地球が告白するなら、それは本当である。

このすばらしい大自然といい、その中に住んでいる生きとし生ける者の有るのは、皆お天道さまのおかげである。我々になるほど在る。けれども、有らしめられて在るほかの何ものでもない、という在り方。これが「有る」を「無し」と自覚している在り方です。これが本当の「有る」の自覚のある「有る」である。

●即身即主

だから、あそこに「無」と書いたけれども、私は「無者」と書いてもよかったんだ。クリスチャンは、

「我は無者である」

と。「即身即主」と言った私がその同じことを、「私たちは無者である」という、この無者である自覚がなければ、「即身即主」ということを言ったら、とんでもないまちがいになる。この無者として神さまの前に本当に平伏す。

この平伏しのイエスは、神の前に本当に平伏しのキリスト。これを謙遜という——謙遜という日本語の言葉はまだ弱い——私たちは本当に平伏しでなければならん。「キリストの



平伏^{ひれふし}」をいただくのでなければ、本当の「有る」ということが、「即」ということが言えない。手離しで「即」(即身即主)と言ったら、とんでもない傲慢です。この「即」の字は、もう十字架を抜きにした「即」はない。十字架を抜きにした「即」なんてものはとんでもない。ところが、新興宗教の教祖たちはこの十字架抜ききの「即」式なのが多い。なるほど、霊の世界はいろいろだから、力を持つてますよ。そうするとみんなそれにつられてしまう。マルチン・ルターは言いました、

「私たちは神を求めている時もお自己を求めている。何と私の罪は大きいだろう」と。これがルッターの自覚だった。

「人間は本当の意味において神を求めることができない。神を求めても、結局自己の救い、安心立命を求めている。いわゆる宗教ではだめだ、ここに福音があるんだ」と言った。

そういういわゆる人間の救いと、こちら側からのなにか霊的合一なんていう、そういった宗教とは違う。このことはピリピ書2章13節に、

13 神は御意を成さんために汝らの衷^{うち}にはたらき、汝等をして志望^{しころがし}をたて、業^{わざ}を行わしめ給えばなり。

「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。」(口語訳)

と。本当の願いは神さまが働きかけてくるべきところのものです。人間は、それは始めはいいですよ、宗教でも。けれども、宗教でそれでおしまいと思つたら、とんでもない間違い。悲願は神の霊願に、キリストの御霊の願いに、御霊の願い、霊願本願にかかわつてこそはじめて福音です。この霊願を受けとる。キリストの御霊の願いを、御霊の執り成しの願いを受けとることによつて、本当の福音のところに来ます。

「人間は神を求める時もお自己を求めている。何としようのないやつだろう」と。これがパウロ、またルターの嘆きであります。ロマ書7章のとおり。

「ああ、われ悩める人なるかな、此の死の体^{からだ}より我を救はん者は誰ぞや」

と。どんなに熱心であつてもダメだ。人間の熱心なんてものはあてになりはしない。また、そんな熱心は危くしてしょうがない。いや、そんな熱心はとんでもないまちがい。パウロ自身がサウロというときにこの熱心をものすごく持つていた。神に対する熱心を。こういう「神に対する熱心」の信仰がクリスチャンのなかにあつて困るよ。えらく熱っぽい。これはあぶないですよ。

「それはダメなんだ、お前はいくら熱心でも。その熱心は買つてやるけれども、それは方向ちがい、また質が違っている。私がその方向と質をみんな変えてやる。変質変貌、変向するぞ」

と。パウロはダマスコ途上で変向、変質させられてしまったんだ。



「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか。お前は神のために熱心で、律法の義につきては責むべきところなしと威張っているけれども、とんでもない。それはみんな私しているからだめた。」

と。それ自身はなるほど人の目から立派なんだ。けれども、それは私している。自己義認というのが一番、罪深い。パリサイ人は立派なんだけれども、立派なパリサイ人がキリストの目からは一番罪深い。まだ躓いたりころんでいる方がよっぽど神さまに近い。

●自分の自由に死ぬ

そういうパウロは、しかし、

「とにかく、まあ熱心は買ってやるから、こいつをひっくり返してやれ」

と。優等生は危いんですよ。パウロなんてのは一番のトップなんだ。トップは危い。そのトップをどん底にまず叩き落とす。それから今度は捕まえる。変質、変貌、変向させていく。そしたら、パウロはもう徹底的に、

「私はあなたの僕でございます。もう私は全然自分なんてものはない。もう無一物。

わが生まれつきのものを塵埃ちりあくたのごとく思う」

と。パウロはひっくり返される。

イエス・キリストは、地上でも大いに、優等生どころでない、まさに天界の天人として自己を示しているんだが、そんなことをしたらとんでもない。それはサタンになってしまう、キリストが。イエスは徹底的に神の前に無者として、

「私の意こころではない。どうぞ、あなたの聖なる意志を、聖意を成してください」

と。意志に、自分の自由に死んだ。自分の自由に本当に死んだ。この自由に死にました。そうしたらば、

「聖意みこころを成させ給え」

と。わが自由意志は放擲している。

これは普通の人には、若い人にはみんな躓きになる。「自由だ、自主だ」と言っただ騒ぎをやっている。私がしょっちゅう言っている「聖意体现」をなすためには、

「本当に自分を空むなしうして、ついに十字架の死に至るまで順したがった」

という。まあおおよそ、自由勝手気ままという今の大体の若い人たちの、身に付いたような根本意識はとんでもない。この「従順」がつまりきになる。

「なんか意気地がないな。自分を捨てて従うなんて」

プラトンはダイモニオンの声に従って生きていた。プラトンは哲人だというけれども、あれは本当は哲人以上だ。本当に哲人以上が宗教人だ。本当の芸術家もそうです。なんでも第一流のあり方をする者は、何をやっていてもそうだ。政治の世界でもリンカーン、グラッ



ドストーン、クロムウェルなんても、みな「順」に生きた。ダイモニオンの声に従う。イエス・キリストは全く神に従った。「指導霊」というけれども、指導するところの霊がある。指導霊というやつがあるんだね、いろいろな宗教の世界に。仏さんの方は弥陀の本願という。みんなそれがある。キリストはその指導霊を、全知全能なところのこの神そのものを、彼は指導霊としたわけです。だから、世界最高ですよ。全く人間の側からは、キリストはいくら形を持っていたってね、本当に神の中に入ってしまったら、真白く輝いてしまった。私が本当にそのようなことになったら、皆さんが写真を撮ったって写らないよ。先生は写っていないなんて(笑)。そういうことになりたいけれどね、写ってしまつてしょうがない。そういうように無色透明になる。無者となる。有者じゃないんだから。無者こそ本当の人なんだ。

●祈りで結ぶ

我々が本当に順うためには絶対に祈りをもつてする。祈りが即ち連結の綱ですから。キリストと私と皆さん一人びとりをつなぐ綱は祈りのほかにない。祈りという綱のほかに綱がない。「結び返し」(RELIGIO、宗教)というが、結びは何で結ぶか。祈りで結ぶ。

聖書を読んで、研究して結ぼうとしたってだめだよ、いくら研究したって。結んだかと思つても、それは「アズ・イフ」、かのごときで、ちつとも結んでない。「ああ、これは素晴しいつながりだな」と思つてたら、どっこいつながつてない。事実が証明する。皆さんは今、現に祈り心地で聴いている。眠って祈ってもいい。眠りの世界は一番深い祈ですよ。

「神さま、あなたの中に」

と言つて自分を托して、キリストの懐の中に入つて眠ることが最大の祈りだ。そうすると、祈りの中で願うことが示されたりすることが私は時々ある。

そういう結びつきという。それは絶対に祈りです。信仰とか何とかいうけれど、この信というの、受けとるといふことも、祈りという場を、事態を通さなければ、受けとる信ということもない。「信即祈」なんです。祈り即信。

だから、祈りが単なるお願いでないということがわかる。祈りとは全托することである。全托は即ち信という。「信頼、信頼」なんていうけれど、ただ気持で信頼したつてだめです。心も魂も身体も投げかけて行くことが、からだをぶちまけることが祈りである。沈黙の雄叫びという。何も大きな声を出さなくていいよ。静かに祈つてください。沈黙で。こういう形でなければならぬというのは、二流三流です。第一流のものは、全然無条件な世界が超優等生なんです。一番どん底の、一番だめの、一番劣等なるものが超優等である。

そういうわけで、なんにも心配は要りませんから。それがこの祈りの世界。祈りとは自分を本当に全托すること。とらわれないことです。無とは何にもとらわれないことです。から。そのとらわれない姿は自分ではできないんだから。これはいつも、キリストが十字架の死に至るまで神に従った。神という驚くべき指導霊に従った。



私たちキリスト者が、見たところ何者でもない。なにか何者かであるなんていったらだめですよ。だめなようだが、地上はジグザグしているようだが、ちゃんと磁石が北を指すように、ちゃんと目的に向かって進んで行く。いいですよ、真つ直ぐなんて行けなくなつて必ず天に行けますから。あなたの方の中にこの御霊があるから。

私たちはいついかなる時も直ちに御霊の世界である。無条件に御霊の世界である。無条件に十字架が受けとられている世界であるから、無条件に御霊の世界です。いいですか。なにか妙な人間的な意識をすることはひとつもいらんですよ。

キリストがついに十字架の死に至るまで神に従うことができた。十字架というと、当時としては非常に悲惨な一番深刻な事態です。けれども、彼がこれを負うことができたということは、もう神さまに従うというのは、ただ仕方がないから従うのではなくて、従わざるを得ない。まことにキリストは、ものすごい神の力で引つ張られているから、そこで進んで行く。必ずその十字架を突破して、本当の勝利の世界に生きる。

「この神殿をこわしてみろ、三日目に甦つてみせるぞ」

と言われたあの生ける神殿キリストは、自らもうはつきりと勝利を内にいただいているから、この十字架を突破することがキリストはできた。

●力ある愛に圧倒

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と。神さまに無条件に従っている世界を「義」といいます。「羊の我」と書く。羊は従順の姿、これが即ち義である。この義はものすごい力を持つ。本当の霊の世界は、力のないものはない。けれども、その力は相手を倒す力ではない。この力は人を持ちあげていく力、担いあげる力です。十字架は私たちを担いあげるところの力である。また、私たちの罪を完全に担いあげて、みんな背負ってしまった。みんな背負ってしまった、もう私は軽くされた。あなた方一人ひとりとは本当に自我という罪から完全に解放されたわけです。解放されたから、非常にすがすがしい自由だが、その自由はまだ消極的自由である。

この十字架の死へのバプテスマと同時に、今度は生命へのバプテスマが即ち御霊^{みたま}である。生命へのバプテスマが御霊なんです。御霊のバプテスマは即ち生命へのバプテスマ。十字架は私たちを死へのバプテスマです。即ち自我というものを徹底的に葬るところの——ということは別の意味でいうと、自我から解放するところの——自我からの解放。それから、一として適^{かな}わざるはなしというこの生命の自由。御霊の自由。この御霊のことはまだ、第2楽章ではおあずけでいい。けれども、決して二段構えではないことを言っておきます。けれども、私たちは、このキリストの十字架が、

「汝らは……己が生命をも憎まなければ、我が弟子となることはできない」(ルカ14・26)



「我よりも父また母を愛する者は、我に相応^{ふさわ}しからず。……おのが十字架をとりて我に従わぬ者は、我に相応しからず」(マタイ10・37～38)

と、みんなはげしい言葉です。即ち、ああいう言葉が出てくると、クリスチャンはどうにもならん。

「自分自身をも憎まなければ」

なんて。これを新しい律法としてつかんだらだめです。これは、キリストの十字架がかくも自分を棄ててまでも私を愛したという、この愛の力です。ロマ書8章の後半でパウロが絶叫しているところのものは、このキリストの愛の、力ある愛です。その力ある愛に圧倒されるから、これがやって来るから、私たちはもうこんな自分なんてものはどうでもよいと。そんなものを自愛なんかしてたら、とんでもないことになる。かくも愛されているから、

「なんじ心を尽し、精神を尽し、思いを尽して主なる汝の神を愛すべし」(マ

タイ22・37)

なんだけれども、本当は「愛すべし」でない。

「私に来てごらん。そしたら必ず愛するよ、愛しないではいられないよ」

ということであります。論より証拠で、この愛が降臨しなければ生きがわなくなってしまう。

●愛信一如

キリストの愛は、いかなる人間のエロースもかなわないところのアガペーである。このキリストの愛によつてこそ十字架が負える。力があるから負える。即ち、上からの愛。上からきたこの愛、キリストにおいて現れた、十字架によつて極つたところの愛を受けとることが信です。

「恵みにより、信仰によりて救われた」

というのはそのことなんです。恵みの方が先です。キリストという恵み、キリストという愛によつて、これを受けとることによつて我々は救われる。信仰が先ではない。だから、信愛一如でなくて、愛信一如と言わなきゃうそです。

愛信一如の世界を一如たらしめるものは祈りである。祈りとは、これを受けとるところの体の投身、投げ身である。これは祈りという言葉の革命ですよ。一般のクリスチャンの考えているような祈りではない。

そういうような、愛信一如の事態です。これが本当に私たちが自分を、

「もうキリストが一切である。キリストが一切であるから、自分は空であり、無である。無者である。無者でなかったら、私はどうにもなりません」

という告白になってくる。

「ああ嬉しいな、もう何者でも無いんだから、こんな有難いことはない。どうぞ、あなたがいくらでも引き受けてください」



と。これが、私たちの本当のどん底の世界です。

私は自分の号を「天鐘」という。大晦日に鐘が鳴る。「ゴーン」と響く。梵鐘には西洋のようなベルがない。無です。無だが、ここに天空が入っているので、無が無ではない。無は無即天である。無天なんだ。無即天という天がその中に入っている。天に抱かれ、天を抱いているこういう世界。鐘を打てば、即ち鳴るのは鐘か天かという。そこで、「天鐘」という。その響きは、天が鳴るのか鐘が鳴るのかという。これが私の悲願であり、あなた方クリスチャンの悲願である。

この悲願を成らしめるものは、このキリスの十字架を本当に受けとつたら——私たちはゴタゴタしたものがあっても——そんなゴタゴタしたものはみんな吹きとばされて、この聖霊の気が、天の気が充満していくから。これが完全に充満したのはイエス・キリストであります。

そうしたらば、その鐘の響きは、聖書の預言者、使徒たちの声は、そのわざは、みな天的な響きを持っている。意味ではない。響きなんです。その響きを聴いていると、もうウワーツとその中に入る。聖書の解釈ではない。

そういうどん底に私たちがたたき込まれる。十字架のキリストによつてたたき込まれたから、この谷底に溪流が、清流が流れている。真清水、谷川の水。その清流を飲んでごらん。ヨハネ伝4章、

「この水を飲む者はもはや渴かない」

と。聖霊の水を飲む。いわゆる谷川の水ではない。キリストが流しているところの、この天的清流を飲む者はもはや渴かない。この清流の真清水を飲んだら、今度はそこからよじ登って行く。ダンテの煉獄以上に楽に登れるよ。

今、私たちはやはりこの第2楽章におきましても、この水をとにかく飲まないことには。十字架を受けとつたら、必ず飲みたくなる。十字架の渴きに至る。自分というものが本当に渴いている。飢え渴く。自分が本当になくなってしまったんですから、

「さあ、あなたという水を、あなたという食べ物을 いただこう」

と。

「我を飲み、我を食らえ」

と、キリストが言われたのがそれです。

●無の現実を生きる

「我を飲み、我を食らえ」というのをここでもって飲んで、今度は山を上ること、実に坂を下るが如し。上ること下るがごとくと。学ぶこと遊ぶが如く。シラーが芸術の世界で、

「最後は遊びだ。人間は遊んでいる時に本当に人間である。本当の人間は遊ぶのである」



と。そういう「遊び」ということは、止むに止まれずして喜んで、「楽しみと愛とをもって」(mit Lust und Liebe)「喜びをもつてやること。パウロの伝道は「遊び」なんだ、言葉の一番深い意味において。

「福音を宣べ伝えずば我は禍害^{わざわい}なるかな、止むを得ざるなり」(コリント前
9・16)

という。この「止むを得ざるなり」という動きがこれが遊びの動きなんです。

私はドイツ語を学ぶ学生に、

「ドイツ語に親しみなさいよ」

と言っているが、今度は

「ドイツ語の中に遊びなさいよ」

と言おう。「よく学びよく遊ぶ」というけれども、真理はみんな「一如」の世界に入ってしまう。両面があるが、両面をサツと持ってしまっている世界なんです。本当の世界。そこが「一」という。一即多、多即一の世界が楽に出てくる。「そうでない」なんていうものはひとつもなくなってしまふ。「ああ、そうでもあるよ」と。これは相対の世界で「そうでもあるよ」と言っているのではないのだから。

そういうようなことになりまして、この「無者」ということ。皆さんはもうみんな片付いてしまった。

「もうおしまい。もう問題ありません」

と。いろいろな問題や課題や使命がありますよね。だけれども、何もありませんと。まだ、「使命がある」と力んでいるうちはダメなんだ。「まだ問題がある」なんて一生懸命で考えているからだめ。まだ結婚問題があります、就職問題があります、いろいろな問題がありますなんて、数えだしたらきりが無い。

この相対的な有る世界に、有る世界がみんな無い。十字架のどん底には。キリストと共に神の聖意^{みこころ}を受けとっていくことが十字架なんだ。十字架とはみこころを受けとることなり。自分の心を立てざるることなりと。

「十字架を負え」

とは、

「みこころを受けとれ」

と同じことです。自分の側は全部はずされている。しかもそれは、すでにその土台は——手放しでやれなんていうのではない——

「すでにその土台は、私がちゃんとその場を十字架で与えているから、文句ないではないか。すでに無の現実ではないか」

と。一番絶対的現実ですよ。皆さんが持っているところの、魂の中に、腹の底に持っているところの現実は無の現実だ。死に至るまで無の現実です。キリストがそうだ。死に至る



まで、十字架の死に至るまで無の現実を生きていた。ということは、同時に驚くべき聖霊の現実であるということ。これは離れたらだめですよ。けれども、まず言わなければならぬのは、どうしても十字架の面だから言うんですけれども。

そういうような、もうはずされて、何もなくなつて、もうどうでもいいという。「どうにでもなりやがれ」なんていう言葉があるけれども、それでいい。

「どうなつたつて、私は大丈夫だよ。倒れたと思つたら、キリストのふところの中だった」

という、ずぶとい信仰です。もういいですね。

「まだ私は問題があります」

という人、手を挙げてください。ないですか。みんなない。もうしようがないです、問題があつたつて。みんなそれは、このキリストの十字架と共にされた。

「我れキリストと共に十字架せられたり。」

という、無の世界です。

もはや、われ生きるにあらず、

「ハイッ」と。キリストの聖霊を飲んだ。

御霊のキリスト、我がうちに生き給う。」

在り給うと。徹底的に私たちは、これが「己を空しうして」ということ。十字架の贖罪^{あがなひ}という命題ばかりやっていて、どうしてそれにおいてこの無を本当につかまないのでか。

●生を生にする者あり

『列子』の中に、

「故有生者、有生生者。有形者、有形形者。」

有声者、有声声者。有色者、有色色者。

有味者、有味味者。」

「故に生なる者あれば、生を生にする者あり。形^{かたち}なる者あれば、形を形にするものあり。

声^{こゑ}なる者あれば、声を声にする者あり。色^{いろ}なる者あれば、色を色にする者あり。味^{あじ}な

る者あれば、味を味にする者あり。」

という面白い言葉がある。生、形、声、色、味と。これは相對界の五感の世界、現象の世界です。この現象界で生きている者があれば、生きている生を、その生きているという事態を生かしむるものがある。それはみんな「無」である。形を形にするもの、声を声する者、色を色にする者、味を味する者。みんな、奥の世界にいくと、形なき形、声なき声、色なき色、味なき味。生なき生という。生なき生は「霊」である。

声楽をする人が本当の声を出そうと思つたらば、声を声させるところの世界に入らないと本当の声は出ない。霊歌は声を声するものによつて声している。画家が色彩をもつて色



する。それは色の奥の世界から色するものでなければ本当の色にならない。味の世界もただ化学的に分析したってダメです。本当の味は味なき世界から味させる。それは自然の味を使わなければダメです。人工の味じゃダメ。そこに素晴らしい自然食がある。味を味する味がある。本当に天然の味はやはりそれ自体の味を持っている。天然のものは、味するものをその奥に持った味を持っている。だから、天然の味するものを持った味を持って天然は私たちに向かってくる。それと同じような角度の料理の仕方が本当の料理だと思う。みんなここからくるんです。

それは表現のできない無の世界。私しない世界。自然にこれ従う、神にこれ従う世界。祈ることと従うことが同じだと。これで従うという字が全く今までの気持とは全く違ってきた。

「まあ仕方がないから、まあ従いましょう」なんていうのはひとつも「従う」ではない。「先生に言われたから、恐いから従いましょう」なんて、そんなのはひとつも「従う」ではない。パツと言われたら、サツとその言葉の中にとび込んでくるやつが、本当に従うこと。従うという言葉が躓きになるくらいな事態であります。

だから、こんな聖書の響きの読み方は、御霊に來なければできない。読めば読むほど分らなくなってしまう。もう聖書は面倒臭いから止めてしまおうなんて。私たちは嬉しくてやめられないということになる。

どうぞ、そういう革命的な読み方を、皆さんは本当に御霊によつて大胆にやってください。今の口語訳はダメですよ。聖書は御霊によつて新しく自分が書かしめられるような訳し方が本当の訳し方である。なにもデタラメ書けというんじゃないですけれども。

それで、パウロがここでもつて、

29 されば汝ら主にありて^{よろこび}歡喜を尽して彼を迎え、かつ斯くのごとき人を尊べ。

30 彼は汝らが我を助くるに当り、汝らの居らぬを補わんとて、己が生命を賭け、

キリストの事業のために死ぬばかりになりたればなり。

いのち生命賭けで彼はやつて来てくれた。「生命賭け」という言葉がなにかこちら側の非常な決意とか力みみたいな響きをもっているから困るけれども、そういうことではない。「献身」という言葉があるが、私たちのすることは皆、何をしていても生命賭けです。ドイツ語を学ぶのも生命賭け。法律を学んでも生命賭け。裁縫するのも生命賭け。料理をするのも生命賭け。その瞬間に対して全生命を賭けることが本当の歩き方をしていること。それはゲーテがそう言いました。

「私は瞬間に対して、ちょうど博打^{ばくち}うちが有るものを皆賭けて、自分の上着も、持っている物をみんな賭けて、いや自分の生命までも賭けて、博打をするやつがあるが、私の生き方も、まさにその瞬間瞬間に対して生命賭け的な、そういった歩き方でありたい、またそうやってきた」



と。さすがにゲーテさんです。そういった生命賭けという、自分をその瞬間に賭ける。

「その集会で私はぶつ倒れても、アーメン・ハレルヤである」

というのが、我々が毎回集会をやっているところの集会献身の事態である。

「どうもあの先生の講義は面白くないな」といつて、講義の途中でエスケープするような学生がある。その学生もわるいよ。わるいけれども、本当に生命賭けの講義をしているなら、学生は引きつけられる。学生をほんとに引きつけるような、欠席なんかしてられないというような、そういう授業を先生たる者はやる使命を、責任を持っているわけです。聞くも語るも同じこと、生命賭けである。

この「生命賭け」ということと、さっきの「遊び」ということが一つなんです。全身を投じていなければいけないというのが、楽しみと愛とをもって、喜びと愛とをもってしていることが、遊びであると同時に生命賭けである。なかなか、そうひと跳びにはそういう境地には入れませんよ。けれどもどうぞ、そういうことを次第に身につけて行ってください。

●キリストに即する無者

これは賀川豊彦さんが書いた文章です

「お祭りは人間は好きだ。本当のお祭りって何だ、人間のなすべきまことの神祭りにお供えすべきものは洗い清めた米でもなければ人参でもない。鯛でもない。それは己が身である。幡随院長兵衛は水野の屋敷に乗り込んで、自分の体をマナイタの上に横たえて、この五尺の生きた鯉をどうにでも料理してくれと啖呵を切ったというが、まことの神祭りは、この五尺の生きた体をこのまま神に捧げまつることの他ではない。まことの神祭りはこの身体全体を神に捧げる他はない。五尺の鯉を捧げることではない。」

そういった、私たちは五尺の鯉。五尺の鯉を神さまに本当に捧げてある在り方が、即ちみんなこの無に収束するんです、すべての事態が。自分を無き者としているんだから。自分を無き者としていうことが「捧げている」ということ。非常に軽くなってしまう。学問は比較研究でしたっけですよ。実存の世界には比較研究なんてのはない。優等も劣等もないんです。優等であり劣等であり、超優等であり超劣等である。何と言ったっていい。

そういうことになりました、エパフロデトが生命賭けでやって来てくれたが、

17さらば汝らの信仰の供物と祭そなえものに加えて、我が血そそを灌ぐとも我は喜ばん、
なんじら衆と共に喜ばん。18かく汝等もよろこべ、我とともに喜べ。

「喜び」という言葉が、全ピリピ書のキーノート、基調です。所々に音楽の中にグーッと一貫して調子が出てくる。パウロは芸術家ではないけれども、もう文章そのものがもの凄



い神品的な芸術をなしている。超芸術の芸術というんです。もう自然にそういうことが出てくる。響きだから。意味じゃないから。

「私はもうじき殉教の血を注ぐ。けれども、どうか喜んでくれ」

と。これは敗北でも何でもない。イエス・キリストと共に神の国に必要な死である。全世界に神の国を来たらせるために本当にこのような血を流した人たちがいる。ブラウニングもそう言いました。

「私もし死んだら、凱歌を上げて、歓呼の声をもって見送ってくれ」

という。ブラウニングのエピローグの詩がそうであります。ブラウニングという人は本当に気持のいい魂だなと思う。ちよつとドイツにはああいう詩人はいないね。

これが、私たちがこの第二楽章でもって徹底的に、「無」の、形なるもの、声なるもの、味なるもの、色なるものの、奥の世界を深くもちながら、これは本当に究極のキリストに即しているところの無者である。キリストに即しているからこそ、本当の無者である。十字架によって即されている。十字架によって私たちはキリストに即されている。同質（ホモウジウス）のものになっているから、キリストが無者であると同質の無者にされていく。

そういう無の事態を私たちはこの第2章の第二楽章でもって深く受けとったわけであります。

